

4-1-2 救急センター（救急診療科）

1. 概要

救急センターの診療

平成 18 年度（2006 年度）の総受診患者数は 37,691 件とほぼ例年並みであった。しかし、救急車搬送数と蘇生事例は昨年度よりも増加傾向にあり重症度が増してきている。（図 1）

また、年齢別の傾向ではこれも例年と同様で、0 歳児が約 15%、0 歳も含む 3 歳未満層が約 45%、6 歳未満は約 7 割である。このうち産科および 18 歳以上の成人症例は 2,763 件で全体の 7.3%。であった。（図 2） 月別の受診者数では冬季に多く夏期に少ない傾向は例年どおり。トリアージ別の分布では非緊急が 6 割、準緊急 3 割であった。（図 3） 救急センターから入院する患者数は総入院患者数の 35%を占めている。月別傾向では 4 月 5 月と 11 月 12 月には 4 割前後と高い。（図 4）

当センターでは開院以来わが国ではじめてトリアージの概念を取り入れてきた。「いつでも誰でも、結果的に重症であるか軽症であるかを問わず」患者を受け入れても、トリアージを行って救命、緊急を優先する診療を行っている。

図 1 総受診者数に占める蘇生、緊急、救急車搬送件数の年度別推移

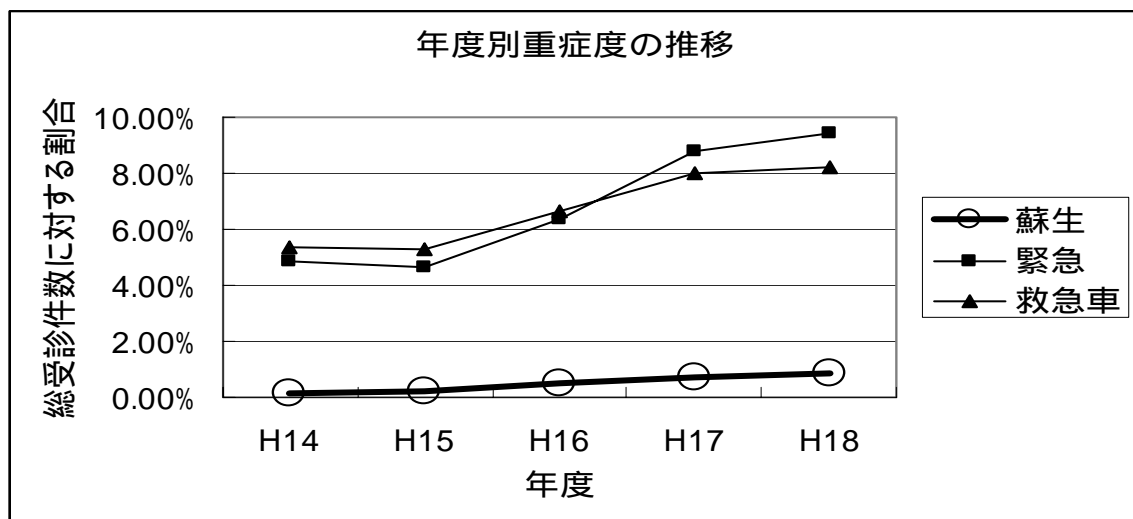


図 2 年齢別受診者数の推移

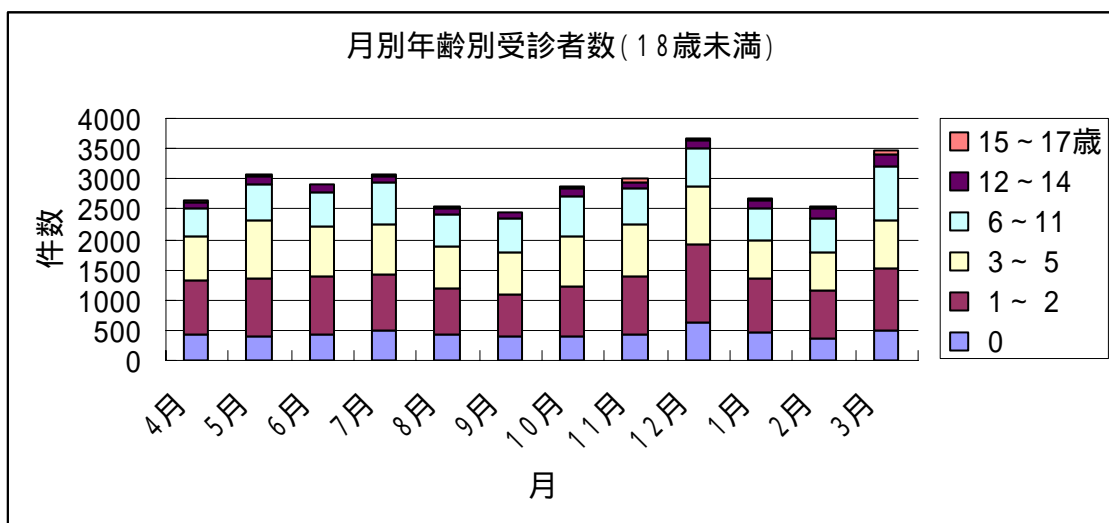


図3 トリアージ別、月別受診者数

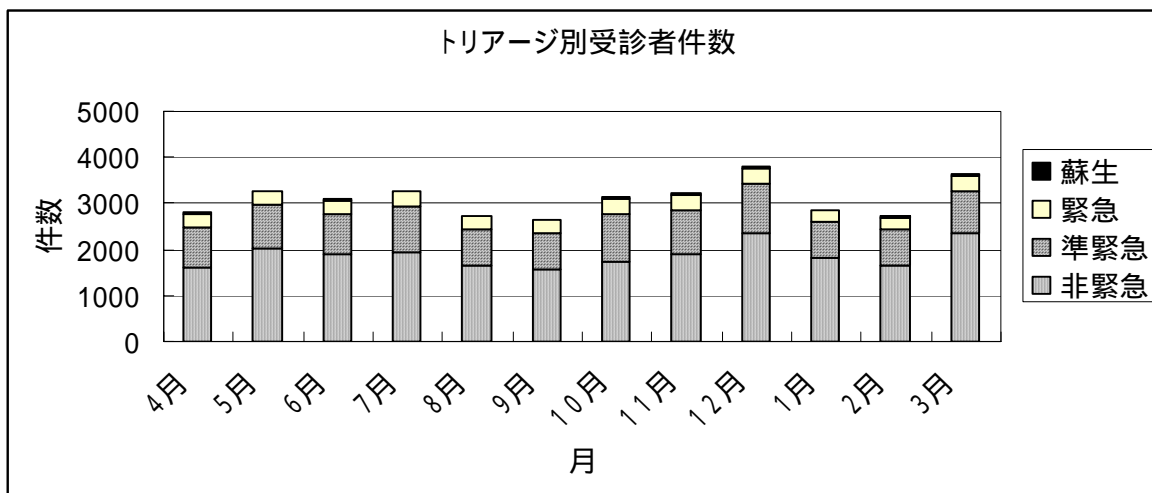
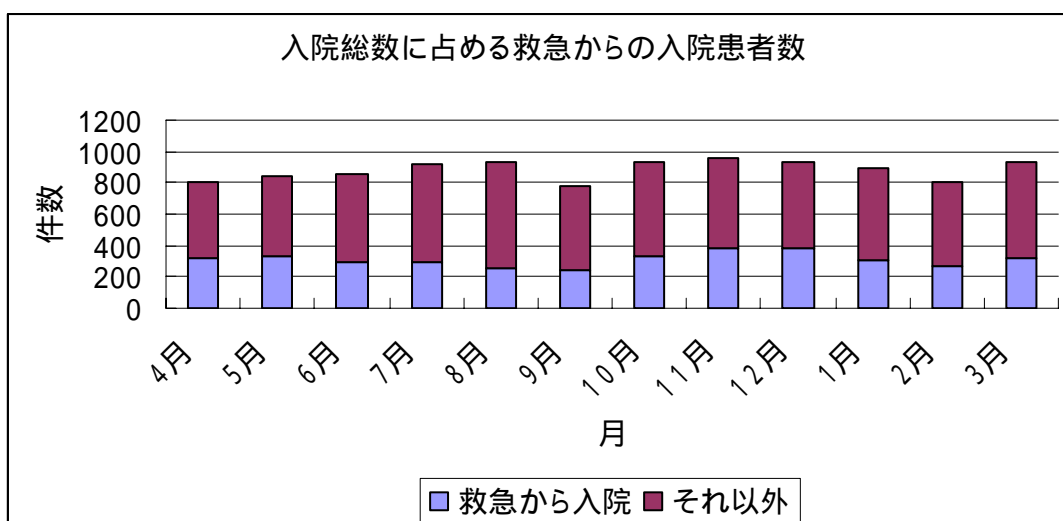


図4 救急センターから入院する患者数の割合



2. 重症患者の搬送

小児重症患者の病院間搬送は、小児の救命システムの要である。救急診療科と救急センター看護師は、24時間体制で他院からの依頼を受けて「搬送チーム」を派遣し、先方の病院での治療に参加し、容態を安定させた後に当院ICUまで搬送している。小児ICUを持つ施設がまだ全国にほとんどない現状で、当センターが果たさなくてはならない重要な業務である。

今年度は昨年度とほぼ同数の37件を扱った。(昨年は38件)

搬送依頼先の地域は東京都内20件、神奈川県7件、千葉県9件、埼玉県1例であった。患児の年齢は新生児4件、乳児15件、1~3歳7件、4~7歳7件、8歳以上4件と低年齢層が多い。基礎疾患としては、上気道閉塞やARDSといった呼吸器系が17例(46%)、心筋炎や先天性心疾患などの循環器系8例(22%)、痙攣重積症や脳炎などの中枢神経系が10例(27%)、消化器系2例(5%)であった。

相変わらず自前の救急車を持たない当院では、他院からの要請に応じて駆けつけるのに時間がかかることが問題である。24時間発着可能なヘリポートを持つ当院の機能が十分行かせていないこと

も課題であろう。この統計には出てこないが先方に到着するまでに患児の状態が悪化し搬送に至らないで無念の思いだけを抱きながら帰院することもある。

3. 国際医療協力

今年度もラオス人民共和国を訪れ、現地の母子保健病院（当院の姉妹病院）と提携してラオスの小児の成長曲線作成および事故防止プロジェクトを継続した。救急医療に関する国際医療協力研究委託事業の一環である。

4. 研修

当院は小児の救急患者数が我が国の病院の中では圧倒的に多いので、小児医療の研修には極めて適した場所だと考えられる。当科では、総合診療部、手術集中治療部のレジデントの研修に加え、国立病院機構東京医療センター、国際医療センター、東邦大学医学部、慈恵会医科大学などをはじめ研修や見学生を多数受け入れている。トリアージの見学と研修にも力を入れ看護部と共にその普及に力を入れている。